子育てかわら版 第１９号

園長だより１２５号復刻

過去の園長だよりです

平成１９年７月１日発行

子供の喧嘩に親は口を出さない

当園を見学に来た教育関係者から、「今時子供らしい子供がいるんですね」といわれるほど、現在は子供らしい子供が少なくなっています。

人間の発達の法則のままに育てれば子供は子供らしく育つはずだと思っています。ですから、子供らしく育っているということは上手に育てている証拠だと思っています。そうでない育ちをしている子供には原因を追究し、そこを正していくことが子育て援助になると思います。

そういう意味で、お母さんたちが犯しやすいことでもあり、分かりやすい問題として友達とのトラブルがあります。昨年の発達診断の説明会でもお話ししたことですが、4歳6ヶ月から、6歳にかけて三人遊びが始まり、このときのテーマは『仲間はずし、仲間はずれ』です。

自分の子が仲間はずれに遭うとかわいそうに思い相手の子供の保護者に抗議をしたり、逆に、仲間はずれにした子の保護者は、「そんなことをするんじゃない」と自分の子を責めたりします。

しかし、この時期は『仲間はずれ、仲間はずし』を経験させなければなりませんので、つらいでしょうが親は友達関係に首を突っ込んではいけません。

幼稚園時代は始めて自分で友達を選び、友達を作っていく経験をする時期です。3歳から4歳は一人遊びから二人遊びへ移行する時期です。友達と遊ぶことが楽しくなって来た頃です。そして大勢で遊ぶためには、その前に三人遊びの課題をクリヤしなければなりません。三人集まれば派閥が出来ます。その結果、一人が仲間はずれにあうことがあります。

この場合の仲間はずれは、普段仲良しで一緒に遊んでいる3人の中で、「今日はこの子と○○をして遊びたい」その結果、一人余ってしまったということで、本来は仲良しですから、また仲良く一緒に遊びます。大勢で遊ぶときの小グループを作る練習をしているのであって、決して、一人の子をみんなで仲間はずしにして『いじめ』をしているわけではありません。12歳から14歳にかけてまた『仲間はずれ、仲間はずし』が自我を確立していく過程の本格的発達課題となりますが、このときにうまく出来るように原体験をしておくのが幼児期の課題なのです。幼児期は、情緒性に支配されていますから、刹那的、即時的、非論理的です。したがって、初めての体験を手探りしながら試行錯誤するにはとても都合がいいのです。その場限りで終わってしまうからです。昨日激しい喧嘩をしたのに、今日はケロッとして仲良く遊ぶことが出来るのです。こういう特徴ある時期に人生において大切な基礎作りをするのが原体験期なのです。これが、自我確立期に初体験をすると論理性が育っていますから、いつまでも根に持ったり、復讐につながったりするのではないでしょうか。

子供の成長は、自立した大人になっていくために見事に順序よく発達課題が決まっています。**正しい成長発達をしているのに、子供の様子の一部分だけを見て、間違った解釈をして子供に圧力をかけないで欲しいと思います。**

2～3歳のときに第1反抗期が現れますが、これは自分の考えで生きていきたいという意思の現れでありますが、「イヤ」を言うことにより、相手と交渉する訓練をしていることでもあります。その力がつくから、二人遊びが出来ます。二人遊びを卒業すると三人遊びの準備が出来た事になります。

三人遊びで仲間外れにしたりされたりする経験を通して、大勢の人の中で人との付き合い方を学習しています。親が口出しをしてしまうと子供から大切な経験をして力をつける機会を奪ってしまいます。ですからいつまでたっても力がつかないので、その課題をいつまでも引きずって、次の発達課題に進めないのです。

特に、仲間外れにされた子は、自分が仲間はずしをしたことは言わず、外されたことだけを親に訴えることが多いと思います。すると、親はいつも自分の子が外されていると思い、「うちの子だけがなぜいつもかわいそうな目に会っているの」と、その想いが矛先を他人に向け、子供のけんかに口を出してしまいます。**そうやっていつも子供が解決すべき課題を親が代行してきたから、自分で解決できない子供にしてしまったのですから、ここはぐっと堪えて、本人に解決させるよう方針を転換しましょう。**